

「訪中団に参加して感じた、自身の果たす役割」 荒田優香子

大学で第 2 外国語として中国語を学び、最近是中国史に関する勉強も始めていました。中国に関する史料や情報に触れるにつれ、「中国に行ってみよう」という想いが強まっていました。そんな折に、青少年訪中団のお誘いを頂き、参加させて頂けたことは非常に幸運でした。

現地では、北京城市大学での書道体験と学生との交流、北京観光地巡り、そして、中日青少年友好交流大会という名誉な場への参加という、充実した 5 日間を過ごさせて頂きました。歓迎パーティーでは、城市大学の学生たちのパフォーマンスを見たり、現地学生の話の聞いたりするにつれ、彼らが日本のことに興味をもってきているのだと実感し、非常に嬉しくなりました。私たち日本の若者には、日中の信頼関係構築への大きな期待がかかっているのだということ、これらの活動全体を通じてひしひしと感じ、身が引き締まる思いでした。日中の継続的な友好的関係構築の一助になりたいという想いが、より強くなりました。

また、5 日間という短い期間でしたが、日本の他大学の学生たちと仲良くなり、様々な話ができたことは嬉しい経験でした。日本と中国の将来の行方を担う、同年代の日本の仲間と、中日友好への想いを共有することができました。

今回の訪中で、日中の将来についての想いを強くする度に考えたことは、自身の日中友好貢献方法を具体的にすることです。訪中以前、私は、「日中関係のために何かお手伝いがしたい」と思っていました。その想いは非常に漠然としたものであり、具体的に自分が何をしたいと思っているのか、何をすべきなのかについて、全く定まっていませんでした。しかし、訪中によって、日中の友好について、想いを強くしたことから、それだけでは不十分ではないかと、考えるようになりました。そして、ようやく、日中関係貢献への、自分なりのアプローチの仕方を見つけることができました。今はそれについて、勉強し、知識を蓄えているところです。今後は、両国の関係について、よりアカデミックに、具体性をもって考えていきたいと思っています。一朝一夕でキャッチアップができたり、成果が出せたりするテーマではありませんが、日々努力していこうと思っています。

今回の訪中団に参加させて頂けたことで、一人の日本人として、日中友好のためにできることをしていきたいと、改めて強く決意することができました。大学生の内に、そして、2019 年という意義深い年に、このようなチャンスを頂けたことに、非常に感謝しています。この経験を無駄にせず、邁進していこうと思います。訪中団を支えて下さった皆様、ありがとうございました。

「日中の文化の差異」 板倉花奈

今回私が大学生訪中団の団員として中国を訪れるまでの私の中国に対するイメージはいくつかあった。大まかに言えば、急速に経済発展し、これからも変わり続ける目まぐるしい国と言ったポジティブなイメージと、政治的印象や中国人の話し方などから少し怖いと言ったネガティブなイメージだ。そう言ったイメージを持つ私が今回の訪中で掲げた目標は、中国を自分の肌で感じてくることだった。百聞は一見に如かずとよく言うが、まさにそれを体験したかったのだ。実際に今回の訪中で中国文化と日本文化の違いを垣間見ることができたと思う。

今回の訪中では、貴重な体験をたくさんさせて頂いた。その中から印象的だったものについて挙げていく。

まず、北京城市学院での地元の大学生との交流では、中国文化の体験ができた。8 グループある中で、私は書道を体験させて頂いた。私は普段書道をしないので、日本の書道は小学校で習った知識しかないが、それと比べるとはるかに書道という言葉が指す意味が広がった。これが北京での初めての驚きだった。中国書道は芸術性があると感じた。その夜、同学院の学生との交流会が行われたが、その交流会では中国の伝統的な文化を現代的に、ポップにアレンジされたものや、日本の文化が中国でどのように広がっているかなどが知れた。ヲタ芸などの日本でもできる人が少ないものまで広まっていることが分かり、意外に感じた。しかし、それは情報力が中国の学生にはあることを示しているとも思った。常にアンテナを張ることは簡単なことではない。中国人の性格を表している事の一つなのかもしれないと感じた。

次に、起業関連施設見学では、起業を希望する人をサポートする場を見せていただいた。ここでは、貸オフィスやデスクだけでなく、共有スペースも充実していた。同じ建物内にあるほかの会社の事業を見える化し、食事はもちろん仮眠スペースまで設置してあった。日本にもこういった貸しオフィスなどがあることは知っているが、訪れた会社ほど設備が充実している会社がどれだけあるだろうか。こういった会社はほかにも多く存在するらしく、中国全体で若者が起業することを歓迎していることが分かった。ここでも、中国が今どういった国に変わろうとしているのかが少し見えた気がした。若者を国全体でサポートし、サポートされる若者も常に新しいことに目を向け、その応援に答えているように見えた。

ここまでは、中国の若者について触れてきたが、次は中国で 5 日間過ごして感じたことをまとめていく。天安門など、様々な観光地に訪れたが、どの場所でも欠かさずグッズが打っている人物がいた。毛沢東だ。様々な場所で彼の肖像画やグッズを見かけたが、一番驚いたのは、天安門広場だった。土曜日だということもあったかもしれないが、訪れていた観光客は、

外国人はもちろんいたが中国人の観光客も多くいた。中国の社会主義的といわれる側面の一つなのかもしれないと思った。もう一つは、横断歩道やトイレ、値切り交渉で感じた中国人の私の強さだ。私の強さというと悪く聞こえてしまうかもしれないが、日本人は「察する文化」を持っているため、多くの国で圧倒されることが多いと思うが、中国人は「はっきりと伝える文化」を持っていることを実感した。

最後に、私が今回掲げた目標は、中国を自分の肌で感じることであったが、終わってから振り返ると、それ以上に収穫があったように感じる。もちろん、中国の文化体験や現地の若者との交流で得たものはたくさんあった。それを通して、日中の差異も多く発見できたと思う。加えて、中国人の芯にあるものを知りたいと思うようになった。私の大学では、中国人の留学生が数人おりその人たちとの交流もなかったわけではないが、その人の背景にあるものまで知ろうと思ったことはなかった。今回の訪中は知ろうとするきっかけになった。今後はそういった身近な機会を活用していきたい。行く前は少し怖いイメージもあった中国だが、次も行ってみたいと思えるような体験だったため、今後の私の人生に大きな影響を受けた出来事だった。日中友好が図られている中で、常にアンテナを張り日中の動向に目を向けるとともに、今後このような機会がまたあれば活用し、何らかの形で中国に関わっていきたいと思う。

「訪中後の視野の広がり」 内山愛梨

訪中前と訪中後の中国のイメージ

私個人が訪中前に中国に対し抱いていたイメージは、自分が中国語学科ということもあり、周りに中国語を学んでいる人が多かったり、中国人の友達がいたり、中国への興味があったりと、中国に対し友好的な日本人が多いのであまり悪印象は持っていなかったです。しかし、一般的に考えると、これまでの歴史や現在の日本と中国の政治面での関わりなどを見たときに、お互いに好印象を持っていないイメージが強く浮かびました。

しかし、訪中を終えてみると、中国に対し悪印象なんてものは一切抱かなくなりました。中国側が日本に対して友好的な態度なのが見える場面から感じ取ることができました。特に、午前1時という真夜中に到着したにも関わらず、北京側の方がわざわざ空港で待っていてくれたことや、日本と中国側がお互いに母国語だけで話すのではなく、双方の言語を織り交ぜながらスピーチする姿勢や、盛大な歓迎会を催して頂いたことなどから友好的な態度を身に染みて感じることができました。

訪中を機に受けた刺激

私は、今回の訪中が初めての海外となりました。まず驚いたことの一つが、研修会で班ごとに分かれてミーティングをしたときに聞いた同じ班の方達の経歴や考え方です。私の班の方たちは半数以上が一度は海外に行ったことがあると話していて、同じ大学生なのに自分が経験していないことをしている姿や行動力に驚きと尊敬の気持ちでいっぱいでした。

中でも特に印象に残った方が2人いて、とても刺激を受けたので書かせていただきます。まず1人目が1年間大学を休学して4か月間陸路で海外を旅したという方で、ヒッチハイクなども経験したと話していました。もし親に反対されたとしても休学して海外に行く決めていたと聞いてその行動力に驚きました。自分だったら考えるだけで実行に移らないだろうと思うことを実行している姿に刺激を受けました。2人目が、大学に通いながら長期休みなどを利用して十何か国も旅行に行っている方で、私は新しい国へ行き新しい人に出会って交流したい、自分と全く違う考え方や文化に触れたいという思いが強く、海外留学をしようかと考えていましたが、この方の話を聞いて、1つの国へ留学するのではなく、旅行でたくさんの国へ行き、異文化に触れ、日本にいないだけで見えない世界をたくさん見るのもいいなと思いました。この考えの変化は、私の人生の中で大きなものだといえます。

次に印象的だったことは、天壇公園や万里の長城などの世界遺産を訪れたときに、ただただ世界は大きいと感じたことです。当たり前ですが、日本にいるときと時代も同じで時間も場所もそれほど離れていないのに、見える景色も見え方も違って、同じ世界なのにすごいなと強い感動をおぼえました。今回の訪中を機に、もっとたくさんの国へ行き日本では見られない景色をたくさん見て、多くの世界を知りたいと思いました。また、世界が見たいなら、今回訪中団に応募したように自分から積極的に行動していかないとならないと思うことができました。

最後に

訪中団に参加していなかったら得られなかったであろう刺激やたくさんの出会いに感謝しています。今回の訪中に応募して良かったと訪中が終わった今深く感じています。有難うございました。

中華人民共和国。正式な国名を知ったのは小学生の頃だっただろうか。初めて中国のことを聞いて広い国だな、人が多いのかなくらいのことしか考えていなかった。それから約10年の時を経て、初めて中国を訪れてみると今まで想像していた中国とは全く違かった。

まず中国と聞いて思い浮かべたのは空気が汚いのではないかという点だ。訪中前、PM2.5や深刻の大気汚染問題などの報道を耳にし、青空は見えないと思っていた。しかし実際は青空だけでなく、きれいな夕焼けも見る事ができた。紫禁城から見たあの日の夕日は今も鮮明に覚えている。自分の目で今の中国の現状を見たことで、大気汚染の観点での中国へのネガティブなイメージがなくなった。

次に中国人に対してのイメージも想像とは大きく違った。自己主張が強いイメージがあったが、今回大学生との交流で出会った1人の女性はまるで違った。円卓を囲んで食事をした時も何も食べない、飲まない。お皿に料理をあげても食べようとせずに、ひたすら私たちに食べて食べてと勧めしてくれる。さらにはその女性が日本語でおもてなしと言ってくれた。日本の文化であるおもてなしを中国の学生が体現してくれて私はとても驚いた。その女性は後日、プライベートで会いに来てくれて一緒に天壇公園と紅橋市場でも共に時間を過ごした。2人の共通の言語は中国語しかなく、意思疎通がとても大変だったが、とても貴重な経験になった。紅橋市場では私が彼女にサプライズでジュースをご馳走してあげたのだが、なぜか飲んでくれない。好みの味かどうかはともかく、気持ちだけは届いていたと思う。また観光地でも何人かの中国人と話して仲を深める事ができた。私はそれほど中国語を話すことができないにもかかわらず、翻訳機やジェスチャーを使ってコミュニケーションを取ろうとしてくれた。想像していたよりフレンドリーで、アニメの話などを通じて盛り上がった。中国でも日本のアニメの人気はとても高いことも認識できた。こうしたコミュニケーションを通して、中国語を勉強しようとする意欲がより高まった。伝えたいことがスムーズに伝えることができないもどかしさを感じた。このもどかしさ、悔しさを忘れずに、帰国後は今回の訪中でできた中国の友達と連絡を取りながら、より熱心に中国語学習に励んでいる。

最後に「Connect the dots」という言葉は私の人生のモットーとも言える言葉で、スティーブ・ジョブズ氏のスタンフォード大学での演説での言葉だ。将来を見据えて点と点を結ぶことはできない、後で振り返って見た時にしか点と点を結びつけることはできないという意味のものである。今回の訪中を通して、新しい友達との出会いや今まで得られなかった経験など新たな「点」をたくさん打つ事ができた。将来この訪中で打った点が決まり、私の人生という一本の線ができるようにこれからも様々なことに挑戦していきたい。そしていつかは何らかの形で日本と中国を繋ぐ架け橋のような人になりたい。

「ありがとう中国」 奥田啓太

始めに中国へ行き感じた事を書いていこうと思う。

21日午前の学校交流では自分は習字の体験だった。日本では珍しく中国ならではのフォントを使って書く習字はとても貴重な経験ができました。同じ習字でも国の文化によって少しずつ違うのだと知れた。

午後の天安門広場と故宮博物館は写真で見た事がある場所を実物で見たので嬉しく思った。かなり広く大きい事を肌で体感した。そして中国ならではの建物の様式、装飾、色使いを体感した。

夜の歓迎会では中国の伝統芸能やワタ芸を見れて楽しかった。日本発祥の歌やダンスを中国人がやってくれている事を嬉しく思った。食事の中で中国人学生と交流した。自分はほとんど中国を話せないけど交流しようとする意思に意味があると思った。もっと中国語を学びたいと思えた。

22日午前には万里の長城へ行った。想像はしていたが、想像以上のスケールを目の当たりにして感動した。とにかく中国は規模がでかい。きつかったがその区間の頂上まで行けて良かった。天気が良かったので気持ち良かった。

午後は天壇公園へ行った。中でも祈年殿は北京で見た中で一番好きな建物だった。釘や杭を一切使っておらず、柱や層の数など細かい部分まで意味が込められている事に驚いた。形も美しくとても存在感を感じた。それだけに中国の人の思いが込められた建物だと思う。

夜のショッピングでは中国のいかにもお土産屋さんという場所へ行った。自分はここでは特に土産は買わず、マクドナルドへ行っただけだった。しかし海外へ行く時はこういう場所の雰囲気を感じることが好きだし、中国のマクドナルドなども知れたので満足した。

23日は若者の起業関連施設の見学へ行った。簡単に言うと、シェアオフィスの見学だ。自分は中国の技術の発展や、会社の仕組みなどにも興味があったので、中国に行く前からこの見学は期待していた。見学では流石中国という感じだった。顔認証のゲートやなんでもQRで決済ができて、睡眠カプセルがあるなど、取り上げ出したらキリが無いほどだった。その中でも一番に驚いたのは、国からの支援である。私が見学した会社は2015年に開業した

シェアオフィスらしいが、この年は毛沢東さんが中国にイノベーションを起こすと宣言した年らしく、数多くの会社が立ち上げられた。この政策にあたり、多い時は統計で毎年1000万元(1.5億円)の支援がもらえるそうだ。そして会社の中の個人にも支援がもらえることもあるらしい。日本ではこういった政策はほとんど見られないと思うので、中国の経済成長の勢いはこのような支援からもあるという事を初めて知る事ができた。

午後は千人交流会に参加した。今までに体験した事が無いような規模のホールに入れて、日本と中国の学生が1000人集まる会は貴重だった。会の始まる前には北京大学の学生と英語で交流が出来たので嬉しかった。

ここまでは中国の感想に近かったが、ここから自分の考えを述べる。今回、訪中団の参加は初で、中国への入国自体も初めてであったが、突然の申し込みを決意した事は自分にとって、とても良い体験ができたと思う。何事も行動力は大事だと再確認できた。グループでは班長にもなり、積極的にコミュニケーションをとれて、目的でもあった中国の文化も知る事ができた。中国は全体的にスケールが大きく、斬新でさらにフレキシブルな為、このような成長を遂げられたのだと思う。その点では日本も学ぶ事は大いにあるだろう。そして中国だけでなく日本人の仲間もできた。また日本でお互いに成長して会のが楽しみだ。

私はこれからも日本人としての誇りを持ち、色々な国を知り、改めて今の日本を考えて生きていこうと思う。

P.S. 北京ダック美味しい。

「中国に対するイメージの変化」川島千里

私は12月20日から12月24日の5日間北京に滞在した。中国のイメージはという質問を周りの人にすると、たいいてい爆買い、声がうるさい、マナーが悪い、汚いといったネガティブな答えが返ってくる。中国に行く前は私も中国に対してのイメージは決していいものではなかったが、行ってから私の中の中国のイメージは変化した。中国に行ってみて、驚いたことは2つある。1つめは、道やお店がきれいであることである。バスに乗っているときに外を眺めていると、道路を清掃するトラックや、人が歩く道をほうきとちりとりを持って掃除している人をよく見かけた。大通りにはゴミが落ちていることが少なく、日本の道よりもきれいなのではないかと思った。2つめは、キャッシュレス化が日本よりも断然進んでいることである。日本は現在キャッシュレス還元を行い、キャッシュレス化を進めようとしているが、中国では現在、現金を使ってお金を払う方が珍しいようである。滞在したホテルの近くの屋台でもキャッシュレス対応していた。

中国に実際行ってみて感じたことは、隣の国であり、顔もよく似ているのに、日本とは違った文化、言語で面白くて、魅力的な国であるということである。今後とも日本と中国は友好な関係性を築いていくべきだと私は考えている。そのためには、本当の中国を知ることが重要だと思う。私自身も中国に行ったことがなかったときには、ネガティブな偏見を持っていた。多くの日本人が思っている中国に対してのネガティブな偏見をなくすことが今後の日本と中国の関係性を良く築いていく上で大切だと思う。このネガティブな偏見をなくすために私ができると思ったことは、インスタグラムを活用して、中国で実際に撮った写真を載せ、中国に対して興味を持ってもらえるよう発信することである。滞日後、万里の長城の写真をインスタグラムに載せたところ、バイトの仲間から「万里の長城どうだった？」と聞かれた。インスタグラムに載せた北京滞在の写真に対して興味を持ってもらえることはとても嬉しいと感じた。滞在から時間が経ってしまっているが、これからも北京に滞在したときの写真を載せていこうと考えている。また、滞在中に食べた中華料理はとてもおいしかったことや、物価が日本と比べて安いことなどの魅力的な点を周りの友達に伝えていこうと思う。私のインスタグラムや中国滞在の体験談を聞いて、1人でも多くの人が中国に興味を持って、訪問するきっかけや、中国のことを知ろうと思うきっかけになることを望んでいる。

私は今回の滞在で後悔したことがある。それは、中国の歴史について勉強せずにいってしまったことである。故宮博物院、天壇公園、万里の長城と3つもの世界遺産に訪問する機会があった。中国の歴史について勉強してから訪問していれば、より興味を持つことができ、楽しめたと思う。

短い期間の北京滞在であったが、中国のことをもっと知りたいと思うと同時に多くの人にもっと中国のことを知ってほしいと思うようになった。また、B班で一緒に行動した大学生はそれぞれ違う目的を持ち、参加していた。頑張っている大学生の話がたくさん聞くことができ、たくさんの刺激をもらうことができた。

「訪中団とこれからの大学生活」 句坂朱里

大学一年生というタイミングで訪中団に参加することができたことは、今後の大学生活を左右する大変貴重な機会であった。実際に中国を訪れ、中国文化を肌で感じ、今まででの中国に対するイメージを覆すものであった。

中国を訪れる前は、中国はごちゃごちゃしていて遅れているというイメージであった。中国はキャッシュレスをはじめとする技術などが進んでいるということは知っていたが、街や市民レベルはそれほど発展していないだろうと思っていた。実際に中国を訪れてみると、あまりの広さに驚いた。道路や建物、世界遺産のスケールの大きさに圧倒された。噂通りキャッシュレスが進んでおり、老人もスマホ決済を使っていることにキャッシュレス社会の進歩を感じた。私も実際に使ってみたかったので、使えなかったことは残念であった。中国を訪れる前の私と同様に、日本人の多くは日本は中国より進んでいると思っているが、その考えを改めなければ中国に置いてかれてしまうと思った。

ずっと、中国に行ってみようとは思っていたが、本やインターネットに載っていないことばかりで驚きの連続であった。隣国であるが、文化や国民性が全く違うことに驚いた。文化の面だと紫禁城と日本城は造りも異なり、トイレの形が平たくどちらが前だかわからなかった。日本に旅行に来ている中国人は声大きいというイメージだが、中国に行ってみるとそれほど声は大きくないことに気がついた。私達日本人学生がうるさかったから気にならなかっただけかもしれない。しかし、中国人に対するイメージは大きく変わった。日本にいるとよく聞く「中国人は自己主張が強い」ということ。確かに、道でよく押されたり、店員さんの宣伝の仕方に驚くことはあったが、中国人は困っているときに助けてくれる優しい人であることもわかった。また、中国人は心が広い。飲食店のトイレが汚かったり、スーパーの野菜や果物が腐っていたりしたが、中国人は気にも止めないようだった。日本だとお店の人に文句を言っている人が見受けられるが中国はそれが当たり前のようだった。日本人のように神経質に生きるのではなく、ちょっとしたことは気にしない寛容さがある。様々な人が暮らす中国を多文化共生を目指す日本は見習うところであると思う。

今回の訪中団では、中国についての発見だけでなく、自分自身のこれからの進路への発見でもあった。様々な大学から国際的な活動をしてきた先輩方に出会えた。話を聞いたり一緒に過ごしたりするなかで、自分が井の中の蛙であったことを知った。もっと国際関係に囚われず様々なことを率先して学び、様々な国に行き世界を知ろうという今後の展望に繋がった。

中国で過ごす時間は濃厚で刺激的であった。中国の街の様子、人々の生活に触れることで、今までインターネットや人の話で聞いた中国と、同じような一面も見られたし、全く異なる一面も見ることができた。実際に見聞きすることの大切さを学ぶことができた。しかし、この5日間ではわからなかったことや新たに疑問に思ったことが出てきた。さらに中国への関心が高まり、北京だけでなく中国各地を訪れてみたいと思った。この訪中団に参加したことで、中国に対する興味と先輩方の話から中国への留学をしてみようと思いついた。留学するためには中国語をもっと勉強しなければならないし、大学の勉強も励まなければならない。訪中団は貴重な経験であったし、これからの大学生活の糧となるだろう。

「百聞は一見に如かずのパラドックスと中国イメージの変化」 白毛夏美

「百聞は一見に如かずというが、本当だろうか。」今回の訪中団に参加する直前に大学の先生が私に投げかけた言葉だ。このことわざは、人から何度も聞くより、一度自分の目で見るの方が確かだということを表している。しかし、一度見ただけでどれだけわかることができるのだろうか。私は今回の訪中を通じて、確かな知識を持って物事を見ることの重要性を学んだ。

「中国の歴史は長い。」「中国はパクリの国。」中国のイメージを日本人に尋ねると例えばこんなような答えが返ってくる。日本の歴史教育では黄河文明などをはじめの方に習うし、漢字や水稻の伝播も中国から日本へという流れなので、歴史が長いというイメージはすんなり受け入れられる。その一方で、科学技術やキャラクターのデザインをよく模倣するので、日本をはじめとした国の企業が経済的な損失を被っている、といったようなマイナスな感情を持たれることも多い。私もまた、人づてに聞いただけのそんなイメージを漠然と抱えていた。

大学に入って中国語を習い始めた私は、中国をこの目で見てみたいと思って旅行で北京を訪れた。その際には天安門広場や故宮、天壇公園などを訪れたが、当時の私はこれらの観光名所の歴史について何も知らず、スケールの大きさや趣向の凝らされた装飾に感嘆するばかりだった。これを通じては、「悠久の歴史を持つ中国」の姿を確かめつつもっていた。しかし、そんなイメージだけでは中国を説明することはできない。このことを私は訪中団に参加してひどく痛感した。

私が今回の訪中でもう一度であった名所の印象は以前のものとは全く違っていた。天安門が見守ってきた歴史の数々、故宮の至る所にちりばめられている秘密など多くのことを岡崎温団長やガイドが教えてくれた。こうした史実をはじめとした知識をもとに見た歴史的名所の重みはとても感慨深いものであった。帰国後さらに詳しく調べてみると、ただ広くスケールの大きいというだけではとても語り切れないと実感した。

ベンチャー企業にシェアオフィスを提供する Ucommune を見学した際には、オフィスの快適さや清潔さに加えて、無人コ

コンビニや仮眠カプセルなど中国の最先端の技術を垣間見た。どれも日本にはないようなものばかりで、日本が見習うべきものも多くあるように感じた。また、液晶ブラインドやフレックスタイム制など、新しいアイデアや価値観に合わせたオフィス設計を目の当たりにして、中国の急速な経済発展のなかで若者たちの活力がしっかり生かされているとも思った。

現代の民主主義国家において、人々がある国に対して抱くイメージというのはその国と自国の外交政策に影響を及ぼしている。それだけの力を持っていながら、私はどれだけイメージに捕らわれずに中国のことを理解できていたのだろうか。日本人のどれだけが中国を正確に捉えられているのだろうか。私たちが持つイメージだけで中国を知ったつもりになってはいけないと、直接中国に触れたことで深く考えさせられた。

百聞は一見に如かず——このことわざの裏には、まずは百回聞いて、そのあとに見るからこそ意味があるというメッセージが込められていると思う。百回聞くだけでも、一度見るだけでも、理解したというには尚早すぎる。今後、中国についての正しい知識を身に付けながら、中国とは何なのかについてより正確に考えていきたい。

「初めて中国を訪れて」 納田梨央

入国審査の列に並ぶこと約1時間、日付を越えた12月21日付けでようやく私の真新しいパスポートに入国スタンプが押された。ついに中国初上陸を果たしたのだ。東京から北京までは約4時間のフライトだった。たったの4時間で行ける隣国だが我々日本人にとってはいまだに近くて遠い国、それが中国という存在だ。言論NPOが毎年行なっている日中共同世論調査によると中国人の対日感情は近年大幅に改善しているにも関わらず日本人の対中感情は今年も8割以上が悪いと答える結果になったようだ。両国民の間のギャップの大きさには驚いた。だが、かくいう私も最近まで中国に抱いていた印象は決して良かったとは言えない。やはり両国が抱える歴史や領土の問題のことを考えると日本人である私は中国人から歓迎される存在ではないと思い距離を置いていた。幸い、そのような偏見は大学や海外留学先で出会った中国人の友達によって払拭することができた。そして今回の訪中団参加で実際の中国を肌で感じ、現地の生活を垣間見ることでより一層中国との距離を縮めることができ、日本にはない魅力をたくさん発見した。特に、新しい技術を積極的に活用しより便利で豊かな社会へと進化している点に惹かれた。

滞在中に支付宝や微信でキャッシュレス決済を体験してみたのだが、旅行者は中国の銀行口座がないので大手チェーン店など以外では利用できないようだった。あるお店でタピオカの購入を試みたらレジの前に並んで現金払いしているのは我々日本人だけで、現地の人は事前にスマホからオーダーして支払いも済ませたのか受け取りに来るだけという状況だったのが印象に残っている。中国人の友達から財布を持ち歩く必要がなくなったと聞いていたが実際にその光景を見て便利なキャッシュレス社会をうらやましく思った。また、最終日には北京の企業を訪問した。エントランスに設置されたカメラが出社した社員の顔を瞬時に認識しモニターに表示されるシステム、お弁当の自動販売機、社員証で支払える無人のコンビニ、仮眠用カプセルの設置、図書館等々ハイテク設備を積極的に取り入れた職場環境に驚きの連続だった。同じく最終日の午後には人民大会堂で中日青少年友好交流大会が行われた。ここにいる我々若者は日中に希望ある未来を築いていく使命を担っており、両国がそれを期待しているということを改めて実感し、使命感と責任感で身の引き締まる思いであった。

これは余談になるが、今回は故宮博物院や万里の長城など有名な観光地に行く機会はあったものの実際に中国人と交流する場というのは残念ながらほとんどなかったように感じた。しかし唯一現地の人と言葉を交わす場面があったのがホテルであった。初日の朝、突然ドアをノックされ開けてみると清掃の方がなにかを伝えにきたのだ。中国語初心者の方は你好しか聞き取れず、とりあえず思いついた単語を並べて中国語話せませんとたどたどしく返答してみた。するとおばさんは中国語分からないのね、と理解してくれた。こんな会話をしても結局なんの解決にもならないのだが、お互いもういいやとなってあははと笑って去っていった。ただこれだけのことだが、おもえば今まで会ってきた中国人は何かしら日本に興味があるか私を日本人と認識しての交流だったので純粋に国籍を意識せず会話した体験が新鮮で思い出に残った。

今回の訪中は私にとって日中友好の架け橋の第一歩であり、中国との長い付き合いのはじまりにすぎないと思っている。これからも大学生活や日中友好協会での活動を通して自らに課せられた使命を果たしていきたい。

「中国文化の偉大さと日中の文化交流の重要性」 野呂りべ佳

まず、訪中前と訪中後の中国や中国人の方々に対する気持ち・考えの変化について述べる。訪中前では、中国に対してネガティブなイメージを持っていた。中国では国家主導で情報統制が厳しく行われているので、社会や文化が閉鎖的で活発ではないと考えていた。さらに、尖閣諸島や歴史問題などによって日中関係があまり良くなかったため、中国人の方々には日本のことを嫌っていると思い込んでいた。しかし、訪中団を通して様々な文化や人との交流を行い、それは間違いであったと痛感した。

理由は大きく分けて3つある。1つ目は、遺跡見学を通して中国文明の深さや大きさを体験したことである。故宮博物院では代々の皇帝が蒐集した宝石類を鑑賞した。私は台湾にある故宮博物院に行ったことがあるが、それ以上に豪華で数多くの珍しい物が展示されており、驚いた。万里の長城では、その長さや建物の頑丈さに当時の中国人の建築技術や組織力の高さを感じた。2つ目は、シェアオフィスを経営する企業訪問を通して、現在の中国社会の柔軟性を体感したことである。シェアオフィス経営の企業に訪問し、創設者の講演を聴いた。彼は、この事業の支援を政府と北京市から受けており、中国全土に同じような施設が76カ所もあるとおっしゃっていた。オフィスはスーパーや廃工場をリサイクルして利用され、環境にも優しい。このように、環境に配慮され若者に人気があるシェアオフィスに取り組む企業を公的機関が援助しているので、クリエイティブな環境が作られ中国の経済発展に繋がっていると感じた。3つ目は、歓迎会や日中大学生千人交流会によって中国人の方々が日本に好意的だと実感したことである。北京城市学院の学生と交流した歓迎会では、中国人大学生の方々がオタ芸やAKBのダンスを踊った。千人交流会では大学生の方々が天空の城ラピュタの「君をのせて」を合唱団が歌っていた。日本のアニメは中国でも人気であることから、日本の文化は中国でも受け入れられているのだと分かった。また、中国人大学生の方々と交流し、好きなアニメや中国語を教えてもらうことで、彼らと仲良くなった。

以上のように訪中団を通して、中国は社会や文化的に歴史の深みがあり経済発展も進んでいる先進的な国家であると理解した。加えて、日中両国で抱える政治問題と文化交流は別であり、特に日本のアニメなどのサブカルチャーは中国人に受け入れられていると分かった。

次に、隣国・隣人として日本や自分が中国に今後どのように付き合っていくべきなのかについて考察する。今回の訪中団を通して様々な人々と仲良くなり、隣国・隣人として中国(人)と友好的な関係を深めていきたいと強く思った。私は、政治問題は日中友好の障害になると考えていた。しかし先述したように、国家間の政治・経済問題による日中関係の悪化は一般大衆の交流に直接的に影響しないと考えられる。交流会では、そのような両国の政治背景を配慮して交流はせず、その個人の背景を知りながら仲良くなっていった。また、料理やお土産店を見て中国文化は日本に比べて華やかな印象を受けた。日中には互いにはない良い文化がそれぞれあるので、良い点を認め合い互いを高めていく関係を構築できると思われる。つまり今後の中国(人)との付き合い方としては、国家間の問題と絡めて人々の性格を判断せず、それぞれの国家の良い面と個人の人柄を偏見なく見ていくことが重要だと考えられる。

最後に、この5日間で自分の人生にどのような影響を与えたのかについてまとめる。今回の訪中団によって、中国語を学びたいと思った。私は大学での第2外国語で中国語を学んでおらず、全くの初心者で参加した。初めて中国を訪れその文化に触れたことで、さらに深く知りたいと感じ中国語に興味を持ったからである。また、随行員の方々から社会人でのボランティア活動の魅力を教えていただいた。活動によって自分の存在意義を見出し仕事においても活動経験を活かすことができるという言葉は、これから社会人になる自分にはボランティアの重要性が理解できた。

以上のように、この5日間によって中国語やボランティアの重要性を理解できたのが自分の人生に深く影響を与えたと感じている。

「訪中を終えて考えたこと」 福田 竜也

百聞不如一見、百見不如一考、百考不如一行……

これまで学校の授業や、テレビ番組の紹介やニュースを通して「中国」というものに触れてきた。しかしながら、それらはどれも人づてに得た情報であって、真実性の保証は一切なかった。大学で中国人留学生との交流や、中国語の学習をしている身としては、どうしてもいち早くこの目で生の中国を見てみたいという思いに至り訪中団への参加を決意した。

行先是北京。留学先としても考えている地域であり、全体の政治の中心地。実質三日間という短い時間の中でも確実に得られた真実がある。

快適な四つ星ホテルに泊まり、毎食食べきれないほどに多く、非常に美味しく豪華な中華料理が提供され、見学先は世界遺産や日本よりも進んだベンチャー企業のホームグラウンド。道路を通る自動車の多くは日本製かドイツ製。綺麗で洗練されたデザインの高層ビルの数々。しかし体の向きを少し変えれば四、五階が最上階の古びた団地が密集。年季の入ったトウトウク。日本にも同じような経済格差があるが、ここまで貧富が近距離に共存しているのでなんとも不思議な気分させられた。ましてや訪中させていただけの自分は明らかに富める側の人間。今回の訪中で関わった方々もその多くは富める側。今回の訪中時で受けた厚遇も含めて考えると手放しに喜んでいられなくなる。なにも中国の経済格差に表面的な同情をするのではなく、中国でも日本でも生まれや選択の差でこうも待遇が違うのかと痛感させられたのである。政治体制は共産主義でも経済は資本主義。その事実を包み隠さずはっきりと見せてくれた。高校の修学旅行で訪れたベトナムでも同じ様な景色が広がっていた。

また、今述べた経済格差のことや政治的発言を避ける方が安全といった外部からでも分かることに限らず、もっと根本的な、考え方の違いを知ることが出来た。

今回の訪中で最も強く私の心に残っているのはバスガイドさんのバス車内での何気ない一言である。それは中国の文化財について話が及んでいた際、

「(内戦の時に王朝時代の貴重な文化財を)台湾の人たちが持って行ってしまいましたから、皆さん台湾に旅行しに行ったときは『文化財返してね』って言ってくださいね!」

この一言にはかなり考えさせられた。旅程中ずっと優しく日本語で冗談も言えるような優秀なガイドさんからこの発言が出るとは思ってもみなかった。この発言自体も軽いジョークのつもりで笑いながら言っていたが、私含め、周囲も苦笑いすることがやっとなかった。なんせ、中台関係はあまりにセンシティブな事柄であるし、文化財の件を巡っては世界史や政治経済で学習するような重大な事項である。勿論個々人の意見の相違はあるが、台湾も中国の一部であるとする本土の考えと絶対に本土併合を拒否する台湾側の考えは私が想像していた以上に根本的な違いなのだ気づいた。あれほどナチュラルにこの発言をした辺り、日本にとっての北方領土問題にも似た感覚を感じた。外国から眺めているだけでは、このような無意識の思想に触れることは出来ないだろう。

私の住む学生寮には台湾人留学生や香港の留学生が住んでいるほか、個人的なつながりで北京出身や上海出身の留学生との交友関係もある。日本人である私にだからこそ彼らが話してくれることもあった。私の周囲の日本人には台湾や北京・上海へ旅行した経験のある人は多かったが、中国人留学生に同じような話を振ると、本土出身の留学生は台湾に、台湾出身の留学生は本土に行ったことがないと言うケースが多かった。単なる偶然とは思えない。

海を隔てた日本からこれらの問題に口出すことは避けたいのだが、自分の内で様々な考えに頭を巡らすきっかけになった。普段私たちが口にする「中国」や「中国人」というのは一語で表現できるようなものではないということは断言できる。

今回の訪中では非常に貴重で一生モノの有難い経験であるのは間違いない。このような機会を戴けたこと、本当に感謝しています。だからこそ、楽しかった、美味しかった、綺麗だったという感想だけで終わらせるのではなく、「一行」するかはさておき、「一見」させてもらえた以上、「百考」まではしておきたい。何を考えたかよりも沢山考えることそのものが多様化の進む現代では必要だと感じた。

改めて私の中国留学の意志が益々強固になり、語学習得への意気も高まった。次のステップでは現地でさらに深い学修をしていこうと思う。

「中国訪問を通じて感じたこと」 三浦彩由香

昨年、内閣府主催の日本・中国青年親善交流事業に参加し、2週間ほど中国に滞在しました。これまで、旅行等で中国を訪問したことはありましたが、このようなプログラムに参加して目的を持って訪問するというのは初めてであり、大変刺激を受けました。しかし、帰国してからはメンバーの中には留学等で中国とのつながりを持っている人も一方で、私個人に関しては全くつながりがなくなってしまったといっても過言ではない状況となってしまいました。悶々とした日々を過ごしていたところ、8月に開催されました日本・中国青年40周年記念既参加青年との意見交換会に参加し中国の方々と交流したことで、やはり草の根レベルの交流の重要性を実感しました。今回もこのような事業に参加することができ、大変有意義であったと感じております。

今回のプログラムで印象に残ったのは主に二点あります。まずは、企業関連施設の見学です。起業を支援する環境が整えられているということを感じることができました。中国では、2014年に、大衆による企業と万民によるイノベーションを支援するという双创という構想が提起されましたが、この施設でも様々な企業が集まり自由に作業している姿を実際に見て、起業文化が深く根付いている様子が伺えました。日本でも、コワーキングスペースなどの施設がありますが、なかなか浸透していないのが現状です。日本と中国には、起業に対する意識に差があるのではないかと感じた瞬間でした。施設の中にも、無人のコンビニや顔認証システムが導入されており、このような先駆的な取り組みから中国の開発のはやさを感じました。このような施設の見学を通じて、めざましい発展を遂げている中国の姿を目の当たりにし、中国は日本と比べ、「より良い社会を実現するために、変わり続けようとする」という意識が強いように感じました。

次に、日中大学生千人交流大会です。同じ空間に、互いの国に関心のある日本と中国の学生が1000人も集まる機会に参加することができたというのは大変光栄なことであり、忘れられない経験となりました。出席者の方のお話の中で、「民間レベルでの交流が非常に重要であり、日本と中国の良好な関係の構築は若者にかかっている」と繰り返し述べられていたことが心に残っています。ミクロなレベルでの交流でも、それが積み重なることによって、大きな意味をなすようになるのではないかと強く思いました。

この事業への参加を通じて、中国へのイメージがまた少し変わりました。高層ビルが建ち並ぶ姿に発展の著しさを感じ、起業施設を訪問して中国の起業に対する支援や意識というものを垣間見ることができました。一方で、レストランのトイレでは割り込まれ、順番抜かしをされ、なかなかトイレに行けないという状況にあり、理解に苦しむ場面もありました。また、バスの車窓からは、綺麗に整備された道やビルが見える一方で、大通りから一本入った路地には古びた建物に洗濯物が干してあるという生活空間も見え、混沌とした場所であるというようにも思いました。中国は、何度訪れても違う一面を見ることが

できる場所であると感じています。

少ない日数ではありましたが、思いがけずこのような機会をいただくことができたこと、本当に嬉しく思います。この経験を何らかの形で活かすことができるよう、尽力したいと思います。

「文化体験が私に与えたこと」 安田花菜

今回私は日中友好大学生訪中団に参加し、とても有意義な 5 日間を過ごすことが出来ました。まず、団全体の目的であった相互理解を深める、という点においては、自分の語学力に対する自信の無さから積極性が足らず、北京城市学院の生徒の皆さんとせっかく中国文化体験を通して触れ合える機会があったのにも関わらず、あまり触れ合うことが出来なかったように感じました。しかし、4日目の夜に街中でバスを利用した時に、自分が乗るべきバスの番号が分からなくなってしまい、中国の方とコミュニケーションを取ることができこの機会を利用して現地の方に中国語で声をかけることが出来ました。とてもひどい中国語でしたが、なんとか会話をし、無事にバスに乗ることが出来ました。北京城市学院でコミュニケーションを取れなかったことが心残りでしたので、最後に会話をすることが出来て良かったと感じています。海外の方とその国の言葉で会話出来たことがとても嬉しかったですし、私自身とても驚きました。短い時間の中で現地の方との交流を心から楽しむことまでは出来なかったように感じますが、言葉が上手く伝わらなかったとしても落ち込まずに、相手とコミュニケーションを取ることに積極的になれたと感じています。そして、自身が参加する目的であった、「現地でしか味わうことの出来ない生きた情報を自分の目で見て肌で感じ、しっかりと学ぶこと」においては、食事や言語、中国の国民性などにわたって広く学ぶことが出来、しっかりと体験することが出来たように感じます。ひとつ目に、故宮博物館を訪れて感じた荘厳さや歴史の奥深さから、中国建国前の歴史についてとても興味が沸きました。私は中国建国後の歴史についてしか学んだことがないので、今回の経験から生まれた興味、疑問を、中国をもっと深く知るための大切な糧にしていきたいです。ふたつ目に、毎日食べた美味しい中華料理がとても今回の旅で強く印象に残っています。以前北京には個人的に来たことがあり、その時の食事はもっと庶民的な物だったので、本格的な飲茶や北京ダックなどを食べる事が出来たことは、私にとってとてもいい経験になりました。3 つ目に、人民大会堂に入り、互いの国のパフォーマンスを鑑賞したことがとても印象に残っています。まず、日本の国会にあたる中国の人民大会堂に、一般の大学生である私たちを招待して下さったことにとても驚きました。厳重なセキュリティや厳かな空気感などから、習近平国家主席らが普段使用している場所に来たのだと実感し、とても感動しました。互いの国の学生らのパフォーマンスでは、中国側の伝統文化を感じられる舞踊や、有名な日本の歌も演奏してくれたオーケストラなど、日本に友好的なパフォーマンスをしてくれたことがとても嬉しかったです。日本側のパフォーマンスも、とてもクオリティが高く、日本らしい演舞やスピーチなどを鑑賞して非常に貴重な体験が出来たなど実感しました。今回の 5 日間で、目で見て肌で感じて体験出来たこと以上に、中国にはまだまだ私が知らない文化や歴史等がたくさんあります。そして、ここで得た経験は、何故そのような文化、風習が生まれたのかといった、歴史的な背景などを学ぶきっかけにもなります。そしてそれを知ることでお互いの文化や風習に対し敬意を持って接することが出来る人になれることに繋がると考えています。私は実際に中国を体感することで、元々好きだった中国に更に興味を持ちました。初めは、初対面のメンバーと渡航するということがあったのでとても不安で緊張していたのですが、友好的なメンバーが集まっており、加えて中国に対しても意欲的に学ぼうとしている人も多かったために、話が合う人がとても多かったので楽しい旅を過ごすことが出来ました。今回の貴重な経験の数々を大切に心に刻み、さらに中国を深く学んでいきたいです。

「中国を知ろう」 山本祥平

はじめに

私は中国語の学習を始めてから、実際に中国を訪れたいと考えており、今回このような機会をいただいて訪中できたことに感謝しています。

中国とは、日本の隣国、人口が世界一位、爆買い、経済成長、日本を含めた世界の国々とは異なる政治制度など、多くの印象・イメージがありました。

「中国は何となく怖い」「中国人は声が大きくてマナーが悪い」、私が暮らしている日本ではこのような考えが主流なのではないでしょうか。日本に住む私達は、中国と隣国であるにもかかわらず、日本を訪れる中国人のマナーや態度から、中国人に対しての印象・イメージを作り出し、また、それを、中国という国に対しての嫌悪感や不信感というものに変化させていると考えます。また、そのような考えに、今もなお、大きな変化は見られません。

そして、私の心の中にも、中国に対しての嫌悪感や不信感が存在していたのだらうと思います。

さらに、中国という国へのイメージは、やはり中国共産党による政治が行われている点にも主眼がおかれると考えます。そ

ここでは、多くの監視カメラの下、常に監視と検閲が行われ、町の中にある検査場や地下鉄では、厳重な検査が行われ、人々は、どこか、息苦しいように生活しているのだろうと考えていました。

これらの印象・イメージが、日本に住んでいる我々に嫌悪感、不信感、怖さを与える一つの要因だろうと考えていました。

では、この印象・イメージは、今回の訪中によってどう変化したでしょうか。

今回の訪中は短い期間ではありましたが、確かに確認できたことがありました。

①メディアやその他情報によって伝えられていたように、監視カメラが街中に多数存在していたこと。

監視カメラが多数街中に存在することの是非は関係なく、日本で広く知れ渡っている中国の事実が確認できたことに一つの価値を感じました。

②日本の世論から発生したであろう中国人に対する不信感や拒否反応が取り除かれたこと。

現地で関わった中国人の皆さんは、とても親切でやさしく、まったく嫌悪を感じさせるような方ではなかったです。隣国同士、似たような容姿を持ち、共通点の多い文化を共有している。「今まで接してきた日本人と変わるところはない」と感じました。

そして、私達は、仮に中国に対して嫌悪感や不信感を払拭することが出来なかったとしても、“中国”は、“中国人”は、決して我々から遠ざかっていくものではなく、むしろこのグローバル化の時代において、今後も、もっともっと関係を維持して関わっていかねばならない存在になるはずであり、なるものであると考えさせられました。

現在の中国という一つの国について考えるとき、政府の政策や行動について賛成できる点が多いとはとても思えません。また、今回の訪中でこの考えに対して変化が生じたということもありません。

しかし、中国人に対しての私の感情は大きく変化しました。中国に住む人々との相互理解も深まっただろうと思います。今後 もっと中国と関わっていきたいと考えるようになりました。

今後、中国による世界への影響力がますます増していくことは間違いないでしょう。たとえ、影響力が弱まったとしても、隣国の日本は、日本人は、良くも悪くも関わっていく必要があるわけです。私は、大学の専門として“中国”を選択する際に、多くの日本人が、こんなにも近い存在である“中国”について無知であることに不安と焦りを抱いていました。

日本人は政治や他国に対しての関心が少ない人々が多いですが、私も含めもっとも互いの理解を深めようと努力する必要がありますし、きっと私のように“中国”への思いが変わってくる人が出てくるだろうと思います。私が今回の訪中で得た知識、思いは誰もが持っているものではなく、大変貴重なものであることを胸に刻みつつ、より「中国・中国人」についての理解を多くの方が持ち、相互理解を成し遂げていけることを願います。

終わりに

この訪中では、日本で“中国”について学ぶ学生との交流があり、大変大きな刺激にすることができました。

大学生から、“中国”という世界的にもシビアな問題をもつと考えられている国へ、伺うことができ、ほんとうに良い経験となり、今後も中国と日本、中国人と日本人のより良い関係構築に携わっていきたいと考えています。

「中国に対する認識」 渡邊紗也佳

私は今回の訪中が 2 回目の中国でした。もともと東アジアに興味を持っていて、大学でもアジアについて学んでいますが、中国に対しては好きだけれどあまり良いイメージは持っていなかったです。東南アジアへ旅行をした時、店員さんは笑顔で優しく接してくれる人が多かった印象でした。けれど、中国の店員さんは机の上に料理を雑に並べるし、上海ディズニーへ行った時は後ろにいたカップルが思い切り横入りしてきたこともあったので、中国人は大雑把で自分勝手だと思っていました。私は異文化を体験することが好きなので、そのような経験も面白いから好きになる方なのですが、中国人というカテゴリーを考えたときに良い印象というのはパツとは出てこなかったです。しかし、今回の訪中を通して私の中にあつた中国人像がガラリと変わりました。訪中 2 日目に行われた歓迎会で一緒にテーブルになった中国人の学生の子とお話したのですが、私はそのときに衝撃を受けました。人には性格というものがあるのは当たり前ですが、中国人は態度がデカくて自己中心的という先入観を持っていた私は、すべての中国人がそうであると勘違いしていました。まだ日本語を勉強したばかりだから上手に話せないと恥ずかしそうに言う彼女は私以上に奥ゆかしく大和撫子であると感じたし、最後に手作りのしおりをみんなに一つずつプレゼントしてくれたのですが、たった数時間の交流のために用意してくれたことを考えるととても感動しました。彼女は私の中国人像とかけ離れていて、衝撃を受けたと同時に、それが当たり前のことであるということがわかりま

した。個人というのはその代表と思われがちであり、その人だけでそれ以外の大衆の印象がついてしまうのと同じで、大衆の印象も個人であると思われてしまうということがわかりました。百聞は一見に如かず、という言葉が今回の訪中中何度も登場しましたが、まさにその通りで、実際に見て経験してみないと私は中国人のことを誤解したままであったと思います。

今回の訪中で印象深かったことがもう一つあります。それは、日本の学生との交流です。私は今回の訪中を中国人との交流をメインで考えていましたが、実際に多くの時間を共有する日本人学生の人たちと交流することも、とても大きな経験になったと思います。私は訪中に参加する人たちは中国が好きで中国語を話せるようになりたいという人や、何かしら中国に関わってきた人だけだと思っていたのですが、実際には全く中国には興味がないし、中国語を勉強したいと思ったこともないという人もいて驚きました。普通の生活を送っていたら絶対に関わることのないようなさまざまなバックグラウンドを持った人たちと、将来を語り合ったり、意見を言い合ったりすることは自分にとってとても新鮮でした。

今まで大学で中国について勉強してきた、中国という国すべてを知ったような気になっていましたが、今回の訪中を通してまだまだ私の知らないことがたくさんあることがわかったし、とても興味深い国であるということを再認識することができました。貴重な体験をさせていただいたことに感謝し、これからも中国について理解を深め、恩返しができるような活動ができるように努めたいと思います。